



「東急 9000 系さよならヘッドマーク付き」
東急東横線大倉山駅にて 2013年2月11日撮影

【2013年5月号】

▼FMやまびこ	米澤 巧美	2
△ノートンの映画大好き！	ノートン	7
▼FMやまびこ番外編	小林 邦子	8
△里からのたより	塩谷 芳彦	12
▼本棚から	西尾 紀子	15
△自閉症児の親も一日にしてならず	momoe	16

◆コラム (葛見 ひとみ) ... 6	◇疑問符だらけの現場用語集 ... 14
◇よこはま三歩 (阿部 未鈴) ... 19	◆後援会・編集後記 ... 20



リンクのご紹介～つながりを求めて～

リンク 米澤 巧美

今年度より生活介護事業所「リンク」が新たに開所しました。とはいえ、場所はこれまで「ワークアシストやまびこ」があった、市営地下鉄グリーンライン「都筑ふれあいの丘駅」徒歩1分の場所と変わりません。つまり、3月まで多機能事業所（就労移行10名＋就労継続B型10名）だったワークアシストやまびこが、それぞれ機能が独立するという形で発展解消し、就労移行は隣駅のセンター南駅で、B型はこれまでと同じ場所で生活介護型「リンク」とその機能と名称を切り替えて、それぞれがリニューアルした次第です。生活介護事業への切り換えの理由ですが、利用者の平均年齢の高さとこれに伴う健康管理に関する配慮も必要となってきたことが挙げられます。リンクの利用者層は、最高齢が50代、中には20代の若い人もいますが、平均年齢は40代前半という構成です。

「リンク」という言葉は、英語で「Link」と表記し「つながる・結びつく」という意味があります。自閉症の人たちは、その「学習スタイル（学び方）」から、「物事の因果関係や結びつきを自然に学び取ることが困難」とであるとされています。そこで、自閉症の人たちが得意とする学習スタイルである「目で見て考える」ことを活かして、多様な意味や価値、地域社会との「つながりを持つ（リンクする）」ことで、彼らの人生がより豊かなものになることを願い、当事業所名はリンクと名付けられました。



写真① リンクの作業風景

今回、FMやまびこの紙面をお借りして新規開所したばかりの「リンク」を紹介いたします。

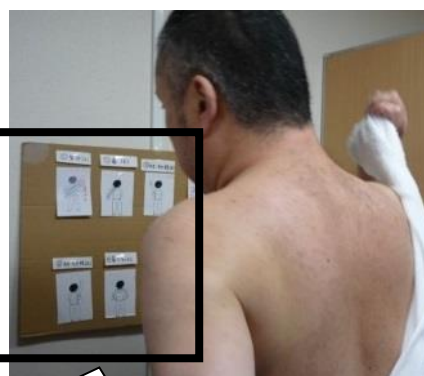
■ご家庭やケアホームでの生活とつながる（リンクする）

リンクは自閉症者の日中の通所場所として、彼らの職業生活を支援する場所です。しかしながら私たちの支援は、利用者一人ひとりの職業生活上のスキルの習得（学ぶこと）・自立（学んだことを活かすこと）を目指すことのみに留まるべきではないと考えています。例えば、家庭生活上のスキルとして、歯磨きの仕方や洗体の仕方等の習得・自立を目指した支援を行っています。リンクで習得・自立したスキルは、活動のシステムをそのまま各家庭やケアホームなどの生活空間に持ち込む（あるいはその逆もあります）ことで応用が可能です。

写真2は、タオルで汗を拭く活動の事例です。自閉症の人たちは、活動の取り組み方を考え、その手順に優先順位をつけながら取り組むことが難しいという学習スタイルを持っています。写真のAさんは、汗をタオルで拭き取る活動で、体の同じ箇所を繰り返し拭いてしまい拭き残しが目立っていました。そこで、Aさんに活動の取り組み方を、手順書を用いて学んでもらいました。手順書の導入は、職員が汗拭きの行程を分析し、Aさんのタオルでの拭き方のスキルをアセスメントすることから始めました。次に、Aさんに手順書のイラストが示す体の部位と実際の体の部位を合わせてタオルで拭くことを伝えました。その結果、Aさんは活動手順書を見て体の部位を一つひとつ確認し、拭き残しなくタオルで汗を拭くことができるようになりました。今後は、生活空間での導入も検討しています。

活動手順書（イラスト）を見て理解する

何を：①タオルを使った体拭きを
どのように：②イラストの部位に合わせて
どれくらい：③手順書のカウント数どおり
終わり：④手順書の行程が全て終わるまで
取り組む



写真② 活動手順書を見て体を拭く

■チャレンジや他者からの「いいね！」とつながる（リンクする）

自閉症や知的障害のある人たちの中には、目の前の作業（あるいは課題）に集中して取り組むことができる人がいます。ただしそれが、学習スタイルの一つである「独特の注意の向け方」によることが多いのも事実です。私たちは、利用者が単に目の前の作業に取り組むことや、彼らができることを日々淡々と繰り返すことだけに重きを置きたくないと考えます。

職業活動は、生活のあるいは人生の基盤の一部であると思います。自らが取り組む仕事に誇りや達成感が持てなくては、働く喜びは半減するはずで。仕事の喜びとは、自ら目標を立ててその達成に向けてチャレンジすることや、他者から「いいね！」と沢山ほめられることで得ることができます。

写真3は、リンクの利用者が使用している「作業表」です。作業システムの中に、作業の量をカウントできる作業表（チップ）が組み込まれています。この作業表によって利用者は、1日の内に作業した枚数を目で見えて確認することができます。また、写真4では作業の時間と内容、そして時間内に作業する量の目標を立て、作業時間終了時に結果を記入していきます。ここには、作業終了までに作業数を達成することへ

のチャレンジがあります。また、見事達成することができれば、支援者から（あるいは同僚の利用者からも）「いいね！」と評価されます。



作業システムの一例

- どこまでPCに入力したかが、目で見て分かる
- 入力箇所がページの最後になったらカウントチップを一つ置く

写真③ 作業システムと作業表の一例

	お仕事	目標	結果
9:15~ 10:45	銀しゃも結び	110	110
10:55~ 12:05	銀しゃも結び	100	100
1:05~	銀しゃも結び	140	

作業表の一例

- 時間と作業内容
 - 目標の数
 - 結果の数
- が示されている

写真④ 作業表の一例

■地域社会とつながる（リンクする）

地域の企業からの受注作業には、実際に世の中に流通している商品を作っているというリアリティがあります。そして、写真5のように、直接企業の方から「ありがとう、ご苦労さま」とねぎらいの言葉をかけていただく機会があることで、作業に対するモチベーションもぐっと向上すると考えます。また、写真6のように、手順書を携帯することで、外部企業で清掃スキルを発揮している事例もあります。いずれも、リンクの人的・環境的資源だけでは提供することができない、貴重な地域社会とのつながりです。今後、リンクではこうした外部の提携先を拡大し、地域の理解者を増やしていきたいと考えています。



写真⑤ 受注作業の納品の一例



写真⑥ 施設外での清掃作業の一例

■人生の喜びとつながる（リンクする）

自閉症の人たちの人生における「学び」は、整理された環境下で多くのことを学び、そして多様な環境下で学んだことが発揮されることが望めます。自閉症の人たちのライフステージを考えてみると、成人期が一番長いステージです。だからこそ、私たちは一番長い成人期が豊かなつながりを持つ時期であって欲しいと願います。

写真7は、余暇支援の1コマです。職業生活上のマナーや適切な行動のルールを守ることと、大好きなレストランへ外食に行くことがつながりをもっています。私たちは、利用者一人ひとりに対して、確かなつながりを形作り豊かな人生の喜びをつなげる支援を目指したいと考えます。



写真⑦ 余暇活動

ここまで、リンクでの試みのほんの数例を示してきました。リンクという名称が持つ願いには、2つの意味があります。第1に自閉症のある人の人生が中心にあり、職業生活や余暇生活、地域生活や家庭生活という各領域と縦横に強くつながっていること。第2に、職業生活と余暇生活、余暇生活と家庭生活、家庭生活と地域生活、地域生活と職業生活が相互につながること。自閉症の人たちの人生の豊かさとは、それぞれの領域が密接に多様につながる（リンクする）ことと私は考えます。

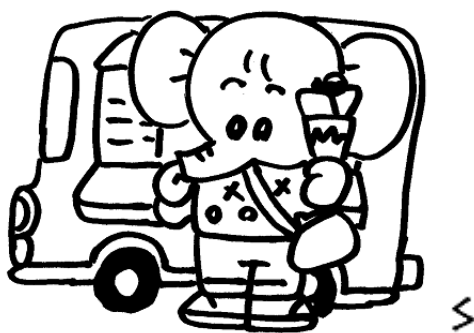
■結びにかえて

最後に、自閉症の人たちの人生を支援する支援者として、私たちは利用者一人ひとりに合った支援（評価に基づく合理的な「配慮」）を目指します。そして、支援を絵に描いた餅にしないために、自閉症の人たちの見ている世界を思う「思慮」を常に持ち続けたいと思います。

～コラム～

はじめまして、保健師職の葛見ひとみと申します。本牧和田地域ケアプラザの包括支援センターに勤めて、1か月になろうとしています。これまで、主に病院や訪問看護で働き、寝たきりの患者さんや病気を抱えているお年寄りに接してきました。この度、初めて包括支援センターの看護師として働いて、びっくりしたことは、思ったより多くの80代、90代、100歳になろうとするお年寄りが「要支援」状態で生活していることです。毎日、テレビや新聞などで少子高齢化社会という言葉を目にし、自分もその領域で仕事してきましたが、地域にはこんなに自分の力で生活しているお年寄りがいるのか?!と、素直な感動と敬意を抱きました。もちろん、新鮮な発見ばかりでなく、泥臭い問題も少なくないですが、毎日、適度な緊張感を持ちながら、仕事させていただいています。今後とも宜しくお願いします。

本牧和田地域ケアプラザ 葛見 ひとみ



ノートの《映画、大好き!》



「ザ・マスター」(2012年)

毎年思うのですが、年度替わりは忙しいです。ずっと忙しいですが、周りに助けられながらなんとかかんとかやりくりしているような状況です。春は色んな人に支えられていることを実感する季節とも言えるのかもしれませんが。「皆さんありがとう、そしてこれからもよろしく」と感謝の気持ちを抱いてビールで乾杯。ビールが美味しい季節になってきたとヘラヘラと笑っていい気分になっているノートンです。

さて、忙しいのですが映画はぼちぼち観ています。アカデミー賞の発表もありましたね。本場のアカデミー賞の作品賞は「アルゴ」が受賞しました。実際にあったイランでのアメリカ大使館人質事件のお話です。私も観ましたが、なかなか緊張感のある映画でした。日本アカデミー賞の作品賞は「桐島、部活やめるってよ」。この映画も観ましたが、高校が舞台の青春映画。非常におもしろい作品でした。描かれているのは今時の若者達の青春なのですが、いつの時代も若者達の本質的な悩みというものにはあまり大差ないのだと感じ、なんだか少し安心しました。さて、今回ご紹介したい映画は、アカデミー賞で3部門にノミネートされていた作品「ザ・マスター」です。派手さはないですが、とても考えさせられた作品でした。では、簡単にストーリーを・・・。

海軍勤務のフレディ・クエル(ホアキン・フェニックス)は第2次世界大戦終了

後、酒に溺れては職を変えるという放浪的な生活を続けていた。そんな中、たまたま忍び込んだ船でランカスター・ドッド(フィリップ・シーモア・ホフマン)と出会う。彼は独自の哲学と手法によって人々の心を開放することを生業としており、「ザ・コース」という団体でマスターと呼ばれていた。フレディはその生い立ちと戦争の心的外傷から心に大きな影を背負っており、マスターのカウンセリングから徐々に立ち直り始める。マスターにとってもフレディを立ち直らせることが1つの使命的なものとなり、2人の絆は深まっていった。フレディはマスターの期待に応えようとカウンセリングを受け続けた。徐々に自分の感情をコントロールする術を見につけていった彼が最後に出した答えとは・・・。

観終わった後、不思議な感覚になった映画でした。感動したという実感は沸かないのですが、後になって思い返すと色々と考えさせる作品です。生きることの切なさや希望。人間にとって何が幸せと呼べるのか。裕福でも正常でも、それは表面的なことだけであり、本当に自分の意思を開放できるかどうか。それこそがその人の幸せの尺度になるのではと問題提起しているように私は感じました。実在する新興宗教の教祖を題材にした映画であり、とても哲学的な作品です。たまにはこんな映画もいいものです。ぜひ、ご鑑賞あれ。



振り返る道向かう道③ 幼稚園から小学校に

小林 邦子

最重度自閉症の息子俊文は47歳になった。世間の理解は得られなかった幼児期少年期。東やまた入所という大きな幸運をいただいて16年。ようやく適切な支援指導をいただくようになり、現在は穏やかな日々を過ごしている。母親の私は高齢者の域に入って改めて振り返る過ぎゆきである。

「さむい」「ごはん」などのかたことが俊文の口から単発的に出ては消えた。5歳になっても意思の疎通ができない。ブロック遊びをしながらブロックのひらがなをじっと見つめているので、文字を読んでやると背を向ける。乗り物の絵本を飽きずに眺めているので「トラックだねえ」などと声をかけても、一人の世界には入り込んでいるようで反応がない。この頃、「オオカミ少年」のはなしを雑誌で読んだ。アジアのどこの国であったか、赤ん坊が狼にさらわれ、その子は狼に育てられた。大きくなってから発見されて人間の世界にもどったが、その少年は生涯を通して会話ができなかったという。しかし幼児期に発見され、訓練を受けた子供は会話ができるようになった例があるとのこと。俊文のように、まるでバリアで身を覆っているように、人の言葉を受け入れずにいれば、オオカミ少年と同じではないか。一体どうすれば会話ができるのか、幼児期をこうしてはいられないとあせりがつのる日々であった。

目を離せば逃げてしまう俊文であったが、親が付き添ってでもいい、5歳児保育後半の半年間でも幼稚園に入れたと思った。幾つかの幼稚園に問い合わせをすると、お寺で経営する幼稚園で面接をしてくださるという。早速、俊文を連れてゆくと、住職である園長先生は留守で、夫人がお寺の玄関で面接をしてくださった。自閉症で言葉が出ないことを述べたが、俊文は面接が分かっているように、きちんと立っている。

「しっかりしたお顔ですね。言葉がないなんて信じられませんね」と、入園を承諾してくださった。園では1年保育のクラスがあって、今年はクラスに12名しかいないので、ここに入れてくださるという。9月から3月までと期間が短いので、園の制服購入は様子を見てからと決まった。



9月から幼稚園入園と決まり、明かりが前方に見えた思いだった。入園前の8月、神奈川県自閉症児親の会のレクリエーションのしらせが届き、初めて参加の申し込みをした。横浜駅東口に集合し、バスを待つ間に俊文と同じ年齢の真行寺君の一家と親しく話合いをした。真行寺君はしっかりした表情で手をつながなくても逃げ出す様子がなく感心した。俊文と同学年で幼稚園に通園しているとのこと。すぐに話がはずみ、バスもプールの遊びも、昼食も一緒に過ごした。家族ぐるみの参加で、父親は真行寺四郎氏、母は英子さん。この日は気づかなかったが、ご夫妻は歌人である。私も若い頃から短歌を作ってきたこともあり、この後の付き合いに大きな影響を受けた夫妻との出会いであった。英子さんは後に『マンホールの歌』という子育ての記を綴った本を出版された。会は自由な雰囲気の子供たちも海岸の散歩やプールを満喫し、自閉症児親の会に親しみが湧いた。真行寺夫妻とおつきあいは長くつづいたが、四郎氏は7年前に、英子さんは1年前に逝去された。子供を遺して世を去るという現実が、わが身にもひしひしと迫る思いである。



俊文の幼稚園登園はじめての日は、他の園児にも夏休み明けの日である。園の制服購入は様子を見てからとしていたので、俊文に私服のスモックを着せていたが、俊文は朝礼の列に頑として入らず、砂場に屈みこんでしまった。「みんなと同じ服を着たいの？」声をかけてみると、「うん」というように、大きく首を縦に振ってうなずいた。母の声かけにいつもは反応が無いのに驚きであった。この大きなうなずきは初めてのことである。園服を頼んでみると、ちょうど園に余分があり、すぐに着せることができた。翌朝からは担任に手をつないでもらって朝礼に立つことができた。

俊文が加わって13名のクラス。若い元気な担任であった。この1年保育のクラスは今年限りということで、半年間でも通園できたのは幸運である。俊文も幼稚園で過ごすことをいやがる様子はなかったが、やはりいつ外に飛び出すか不安があるため母親の見張りは欠かせない。ある日、園庭で遊戯をする時間に俊文は外に出ることを拒んだため、母と共に教室に残った。教室は2階にあり、俊文は窓から庭を見ていたが、担任が建物に近づいたとき、嬉しそうに「センセイ」と声を出した。俊文が単発的に言葉を出した瞬間に、なぜか私は驚きで声が出ない。この時も驚きで息を呑んでしまった。「せんせいだね」と母親が言え、又言ったかもしれないと、このことも深い後悔である。



わが家から幼稚園には横浜駅行きのバスに20分ほど乗るが、昼間は1時間に2本しか通っていない。幼稚園の帰りは時によって30分ちかくもバスを待つ。バス停の脇に大きなペットショップがあるので、俊文に水槽の熱帯魚や小鳥を見せて時間を過ごすのだが、俊文は鳥かごに興味を持った。鳥かごを開閉する口を上下させて喜ぶので、情操教育への望みをつなぎジュウシマツのつがいと鳥かごを買った。バスを待つ間、俊文は嬉しそうに鳥かごの口を上下させていたが、1羽があっという間に飛び出してしまった。どこまで飛んだのだろうか、あきらめて残った1羽を飼えばよいかとそのまま立っていると、俊文が無言で私の手を押し出すようにする。俊文の視線の先を見ると、道路の向こう側に小鳥がうずくまっている。幼鳥なので飛べないのだろうか。「ぜったいにここを動かないでね」と俊文に言い、私は一人で道路を渡り小鳥を拾いあげて俊文のところに戻った。手を離せばすぐに逃げ出す俊文だが、この時はじっと立って待っていて小鳥をかごに入れると、ほっとした表情を浮かべた。それ以後、俊文は鳥かごに触れることもしなかった。俊文の思わぬ一面を見た思いである。

毎日緊張の連続であったが卒園までなんとか通った。園長先生はじめ職員の方々に御世話になり、貴重な体験をさせていただいた半年間だった。

昭和47年、学齢となる俊文を特殊学級に入れたと思った。当時は学校に拒否されれば就学はできなかった。1月に学校で面接を受け、何とか椅子に落ち着いていてくれて、兄も通う学校ということで入学を許可された。家から徒歩10分ほどで、俊文が近くの小学校に入学できたことに安堵した。体育館での入学式には普通学級の新生と共に俊文も交じた。特殊学級の新生は男児ばかり3名である。

担任は若い女性2人で、俊文もなんとか落ち着いて坐っている様子を保護者の席から見ていたが、式のさなか俊文はとつぜん椅子を立ち、壇上に向け上ってしまった。そして壇上をかけぬけて奥にあった仕切りの中に入っていった。壇上の校長先生がすぐ追ってくださって、俊文を抱き上げ、式の間ずっと笑顔で抱いていてくださった。校長先生の式服を汚さないだろうか。はらはらしながら、どうすることもできなかった。おおらかで頼りになりそうな校長先生だったが、6月に転勤されたのはなんとも残念なことだった。



特学担任の先生はそれぞれ、乳幼児の母親である。普通学級より少しゆとりがある任務を希望されたのだろうが、俊文の多動に振りまわされる連続のようだ。兄の2年1組の教室は隣にあった。兄の存在にすぐに気づいた俊文は、自分の教室を抜け出し、兄のところに行ってしまうらしい。俊文という弟が負担にならないかと心配したが、担任の先生は「私の娘も同じなのですよ」と対処してくださったのは有難いことだった。しかしすぐに外に飛び出してしまうという。学校では教室にトランポリンを購入してくださったのは有難く、これが大の気に入りとなった。下校時間に迎えにゆくと天井に頭がつくほどまでに飛び上がって楽しそうにジャンプをし続けている。学校の児童たちが面白がって教室をのぞきに來ていた。

俊文は学校より帰るなり外に飛び出す。俊文を追う毎日に体力の限界を感じ軽自動車を購入した。私は20歳で運転免許を取得して実家の車を運転し、ラリーに参加したこともあり運転は苦にならない。車で広い公園に連れて行って思い切り遊ばせようと、先ず俊文を旭区の大池公園に連れて行った。広い池を持つ公園だが、俊文は水を見ると石を投げ込みたくなるらしい。「池に石を投げてはいけません」と言うと近くで写生をしていた小学生の絵具の筆洗を、あっという間に池に放りこんでしまった。この小学生はどんなにショックを受けたろうか。すぐに替わりの筆洗を買ってやりたいと思うのだが、俊文を連れていてはそれができない。お母さんに新しいのを買ってもらってねと、お金を渡し小学生にひたすら謝ったが、広い公園に来てお母さんの気持ちが安らぐことはないと思った。

人の居る公園がダメなら人のいない山奥に連れてゆこう。企業戦士の父は関西での単身赴任を終えたが、通勤の疲れから休日は家でごろごろと過ごす。父は免許を持っていないが、父親が居ると俊文の行動も抑えられる。私は若い頃に沢登りをしていたので、丹沢山系の地理には詳しかった。車の入るぎりぎり上流の河原まで行き俊文を遊ばせたが、これは親が息をつける時間となった。始めは石を投げ込み喜んでいて、浅い流れに入り、ジュースの空き缶に川の水を汲んでは流れに水を落として遊ぶ。水が落ちる瞬間にできる模様を楽しんでいるらしい。飽きもせず何時間でもくり返した。家族は山の大気を思い切り吸って、のんびりと行楽気分を味わった。田村さんと匡弘君も共に4人で行くこともあり、近所のSさん一家と車をつらねて行ったこともある。親戚の家族が集合してバーベキューをするなど、おおがかりな行事もした。私のきょうだい達とは互いに子育てに追われていて疎遠になっていたが、賑やかに幼いこども達も一緒に楽しんだ。俊文は誰が居ようと関わりないという思いだろう、飽きることなく川で遊び、呼ぶと焼き肉などを食べるが又流れに入ってしまう。こうして丹沢へのドライブは定番となった。

田んぼのたより

新年度を迎えるにあたって所感の一端を申し上げます

理事長 塩谷 芳彦

新年度を迎えるにあたって、所感の一端を申し上げます。

私たちは、「自閉症・発達障害の人たちの社会が広がる可能性を模索し、支援する。」を基本に、自閉症の人たちへの支援において、現在の事業への取り組みをとことん掘り下げ、事例に対応した支援の幅を広げ、これを専門とした豊富な品揃えで、そのニーズに応える。いわば自閉症スペクトラムの全てに対応できる総合的な支援技術を持つ法人を目指しています。

その事業の今後の展開について、基本的な方向を次のように考えています。課題は多くありますが、事業の実現可能性を探り、着実に具体化していきたいと考えています。

1つめは、いわゆる重度の自閉症の人たちへの日常生活支援としての生活介護、施設入所支援、共同生活介護(ケアホーム)の事業についてです。これらを、法人の基幹事業として位置づけ、その中心的施設となる事業所について一定規模の量を確保するとともに、その利用者の一定割合に対しケアホームを整備してまいります。

ノーマライゼーション、地域生活移行がいわれて久しいわけですが、まだ地域の社会的資源が乏しいという現実において、法人に期待される役割はきわめて大きいものがあります。あらためて障害者の支援ニーズの把握および地域移行支援プロセスを整理し、レジデンス機能の原点ともいえる、入所施設としての生活支援機能、地域移行の機能、一時保護機能を再整備して体制を強化してまいります。

2つめは、本人及び家族の地域生活・家庭生活の支援に向けた取り組みを目指した事業展開、即ち、施設支援から社会での生活支援へ眼を向けて事業化を企図してまいります。

例えば、ショート(ミドル)ステイを通じ、支援のための評価ならびに現場での相談機能を充実させるとともに、ヘルパーセンターの事業を中心に、移動支援、行動援護に加え、生活支援の観点から余暇(空き時間)の過ごし方、居宅支援を含む業務の拡充を意図しています。

3つめは、中度、軽度の自閉症の人たちにも対象を広げ、社会生活(暮らし)を支援する観点から、機能的サービスを展開し、その比重を高めていくこととします。

特に就労支援、自立支援にあつては、高機能自閉症、広汎性発達障害の人たちへの支援に関心が高まっており、ニーズも多様化してきています。重度の人たちへの就労支援を目指す姿勢は継続して維持してまいりますが、加えて、中度・軽度自閉症者及び発達障害の人たちを対象においた事業シフトをとることとし、就労後において社会の中での「暮らし」の観点から、社会生活支援のためのプログラムを整理し、また他の資源とも連携し事業の拡充を図ってまいります。

4つめは、自閉症や発達障害の支援において、理論と実践の両面を兼ね備えた支援技能を持つ法人をイメージし、その成果を発信できる研究・実地研修機関としての機能を企図します。

この法人が、自閉症スペクトラム支援を中核とする専門機関として各機関との共同研究をさらに実のあるものにすることに努め、自閉症・発達障害支援の中心的役割が担えるよう機能の充実を図ることとします。

最後になりましたが、事業展開に欠かせない最も重要な条件は、事業企画の立案、具体化に向けた体制と人材の確保、育成です。内外研修の充実、自己啓発支援など制度として取り組み、育成機能を充実させ、専門職の涵養、キャリアを形成していくような構造にしていこうです。私は、この取り組みによって、ヒューマンパワーという新たな無形資産価値の創造に期待しています。

いずれも目新しい物ではありません。しかも、あまりにも盛りだくさんの感があります。また、一朝一夕で結論がでるような問題でもありません。収支面からの経営の安定も欠かせない課題です。限られた経営資源を有効、効率的に活用することにより、将来へ向けて常に新しい課題への挑戦を心がけ、独創的、先駆的な事業展開を模索し、「創造する文化」をこの法人の文化として定着させたいと願っています。





疑問符だらけの現場用語集 (49) 人材育成システム

前は、人材の話をしました。多くの福祉現場で人材不足と人材流出が慢性化しています。福祉は3Kだからとか給料や待遇が悪いからと言って、人が集まらないのは「仕方がない」と諦めてしまいがちです。ですが、本当にこれは仕方がないことでしょうか？

私が代表を務める、特定非営利活動法人自閉症eサービス (<http://www.jiheishou-e.jp/>) は、大阪・阪神地区を中心に支援者間のネットワーク作りと人材育成を事業の柱にしています。実はこのアイデアは、私が横浜やまびこの里で働いていたころ定期的に開催されていた「自閉症（療育）セミナー」という勉強会がモデルで、その発展形だと言えます。自閉症eサービスの人材育成システムは、次のような仕掛けになっています。

- ①基礎講座、専門講座、ワークショップなどの各種人材育成プログラムを通年で開催する。年度当初に年間予定を公表し、受講生は常時募集する。
- ②年間を通して受講したい方は、「年間パス」に登録すると各種プログラムを割引または無料で受講できるようにする。ちなみに、個人パスは15000円/人です。
- ③年間パスと受講料を原資に、講師謝礼や会場費などの経費をまかなう。外部からの助成金や補助金に頼らず、赤字経営にもならず、自分たちが勉強するために自分たちの受講料を集めて研修をする互助の仕組み。
- ④受講生の中から、事例発表や講師をやりたいと希望または仲間や施設長から推薦されると、原則、誰でも登壇できる。さらにコンサルタント養成講座、トレーニングセミナーのトレーナー見習い、フェロー（研究生）制度などを設け、講師やトレーナーにステップアップする道筋を用意する。
- ⑤講義用のレジュメやワークシート類、コンサルテーションで使う評価キットや記録用紙などは自閉症eサービス内で共有し、必要に応じて外部に持ち出せるようにする。
- ⑥熱心に参加する受講生には法人の活動会員や正会員になってもらい、運営の担い手を増やす。学生や若手スタッフには無償で年間パスを付与する制度を設ける。

自閉症eサービスでは、毎年150人前後の支援者・家族らが年間パスをとって受講しています。何らかの形で人材育成プログラムに参加している施設や事業所は50団体以上です。特に新任研修の場として活用する施設・事業所が多い印象です。

これまで人材育成と言うと、単発の講演会、他施設見学、先輩職員による現場OJTなどがバラバラに提供されてきました。また、偉い先生の講義やコメントを聞く受け身のスタイルが主流でした。eサービスはこれを抜本的に改め、自分たちが主体的に運営し、率先して学び、学んだことを現場実践に生かしそこで得た知見やノウハウをみんなで共有するという、研修と現場実践を循環させる持続的な育成システムを構築しようとしています。

＜自閉症eサービス代表 中山清司＞



本棚から

『自閉症スペクトラム

10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体』

本田 秀夫 著 ソフトバンク新書

2013年4月6日、「世界自閉症啓発デー2013シンポジウム」が新霞が関ビル内灘尾ホールで開催されました。

シンポジストには、当事者、保護者、医療・福祉関係者がそろい、この本の著者本田医師も、その中の一人でした。

精神科医師・医学博士である著者は、1991年から横浜で発達障害を専門とした臨床・研究に取り組み、現在は山梨県立こころの発達総合支援センター所長も勤めておられます。

この本は、長きにわたり「発達の気になる子どもたち」一人ひとりを幼児期から成人期まで一貫してみてこられた著者が、発達障害や自閉症を知らない広く一般の人たちにも、わかりやすく身近な事として知ってもらいたく、作られたものです。

（今日では）「自閉症スペクトラム」は人口の10%は存在すると考えられ、その特性は「臨機応変な対人関係が苦手で、自分の関心、やり方、ペースの維持を最優先させたい」という本能的志向が強いこと」と要約され、その具体的な事柄について例えを交えて説明されています。

なかでも、「こだわり」に関する2つ

の法則（①認知が発達するとこだわりも発達する ②こだわり保存の法則）と「こだわりを活用する」発想が実際の生活の中では実用的な支援に繋がるという話しに、共感しました。

また、第三章での自閉症スペクトラムと自閉症スペクトラム障害との関係についての説明、それに続く第四章では、自閉症スペクトラムは「治療すべき『病気』」ではなく「支援すべき少数派の『人種』」である、という認識の上にたち、家庭や学校・地域社会の中で、どのような教育や支援が求められるか、を多岐にわたり詳しく語っています。著者自身が運営に関わっているNPO法人の活動にも触れ、医師という枠を超えた著者の幅広い行動力と人間性が伝わってきます。最後の章では「自分が自閉症スペクトラムかもしれないと思ったら・・・」と題し、広く読者に呼び掛けています。

先に述べたシンポジウムにおいて「自閉症の人の社会適応の良否は社会的要因に大きく左右される」ことを示唆された氏の意思がこの本にも通じていることを実感しました。「自閉症の人たち」の生きにくさを知りたい方、（第三者に伝えたい時も）、ぜひこの本をお勧めします！ <西尾 紀子>

自閉症児の親も

一日にしてならず。

★momoeさん紹介★

知的障害のある人の地域生活支援をする特定非営利活動法人の理事です。首都圏通勤圏にある某市に夫と夫の母親(要支援 2)、某病院機構事務方に就職した長男と生活介護事業所(通所)5年目・23歳で知的障害と自閉症がある(療育手帳で最重度、障害程度区分 6)の次男と暮らしています。

ペンネームは
momoe



発災時支援への取り組み の巻(後編)

1月8日 地域医療に取り組む診療所、市職員組合、高齢者介護事業所などで構成する市民集会で市長への要望書を提出する。地域防災関係では5項目①避難所運営マニュアルの検討項目に福祉避難所を必置とし、当事者を交えて検討の場を設けること②三次避難所指定の福祉施設に十分な物資を確保するための予算を確保すること③要援護者支援に特化した避難訓練の実施④災害時投薬の確保をすること⑤安否確認と避難所に来られない当事者への物資などの支給支援。

提出と同時に行った市長との懇談で、避難所マニュアルはその地区の学校と自治会で作成することになっていて、「一律一定」はなかなか難しい、とのことだったので、「その地域の当事者を交えて検討するようにしてほしい」ということを担当課に強く要請してほしい、と伝えました。自治会と行政との関係は、自治会の「自治」を大切にしたいということから、なかなかトップダウン?は望めないのが、やはりそれぞれがそれぞれの地域で出張っていくしかないのか……。数が少なく、地域での横のつながりが持てていない「知的障害者家族」、だれが引っ張るのか。

2月8日 なかなか各地域それぞれで、というのは難しいので、まず全市を範囲に各市区自治体の防災担当や民生委員、児童福祉委員、地区社会福祉協議会会員を対象に「知的障害のある人を知っていますか?」という学習会を開く。準備段階からまず行政の市民課の厚い壁に阻まれ(チラシ配布に難色を示される)、あらゆるつてをたどって、また、地域の集まりに勇気を持って参加してその場でアピールするなどしてそれぞれ努力し、当日集まってくれた地域の方は200人近く。地区によっては学習会の形を取って20人もの方が集まったところもあり、防災のことより、知的障害や自閉症のある人たちへの配慮についての話がわかりやすかった、これを知りたかった、というアンケートの回答が多かった。「ぜひ皆さんの地区でもこのあつまりを開かせてくださ

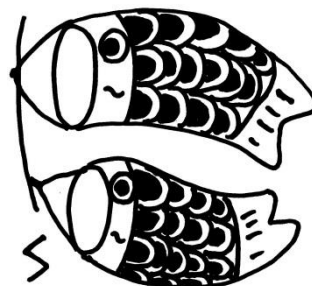
い」との投げかけには3つの地区が応じてくれ、あるところなどは、「防災のことはいいから、障害のある人への支援についてだけ、話してほしい」ということに・・・(何を隠そう私の住んでる地域)。前回書いたとおり、「日常生活の延長線としての発災時支援」なので、これをとっかかりに「じくじくと」入り込んでいこうかなあ、と画策している。

2月14日 一次避難所に併設されるものから民間施設におかれる三次避難所までとりあえずめどはできたように思えるが、そこに行くまでの手段については「家族で」ということが基本になっている。しかし、外部からの支援としてボランティアセンター開設と同時に移動への支援も項目にあらかじめ入れておいてほしい、また、物理的な準備、例えば電源確保から必要物資まで、障害のある人特有のものをあらかじめ準備してほしいという要望を担当課にし、その回答が示されたが、やはり市長の回答と同じで、「ガイドライン」を作成して配布し、各自治会での運営委員会にゆだねるという形。

5月～ 1月8日の要望書にたいする関係部課の文書回答、昨年度の施策検討連絡会による予算要望にたいする文書回答があり、また、2月14日の回答を受けての改めでの要望をする予定。6月には私の住む地区での地区社会福祉協議会研修会「支援を必要とする子どもたちを育てて」という研修会が開かれ、私も出席予定。(じくじくの第一歩)

＜前年秋以降の次男の様子＞

2012年10月 来年度生活介護事業所(通所)をもう1つ作るため、職員の採用が始まり、若い女性職員が次男の事業所にも研修ではいる。中の1人、以前幼稚園教員をしていた20代後半の職員をととても気に入っていたらしく、どうもある朝から行き渋りがあるなあと思っていたら、娘さんの送迎をしている先輩母から、「今週から次男君の気に入っている職員さんがうちの事業所に来ているわよ」と聞く。その先輩母は、赤い羽根街頭募金の際に次男がその職員と腕を組んでにこにこ立っていたのを見たらしく彼女の研修場所が移ったのを教えてくれたのだ。これで今週の行き渋りの原因がわかった! 相変わらずわかりやすい奴。



2012年10月23日 上記の来春立ち上げ生活介護事業はメインをパンづくりにするとのこと。次男がそこへの異動を打診される。粉のベトベトするのを練ることが大の苦手だった次男が今ではだれよりも早く生地並べまでするのを見て、犬用ではなく人間用のパン作りまで持っていこうとのこと。ただ、場所が今より遠く、途中乗り換えをしなければならないこと、仕事の内容がしっかり組み立てられる前、また、新卒者が多い中での立ち上げ時の不安定さがある時期から参加すると「独自の俺ルール」を作ってしまう可能性があるのも、きちんとスケジュールが組み立てられる段階になるまでは今のところにて、時々技術的な実習をしに行くということにする。(12月から月2回程度から始めている)

2012年11月21日 春の大不調を乗り越えてからずっとおおむね平穏な日々が続いているため、次男の体重が1.5kg増えている。(毎月の健康チェックの結果を見て)今のところ163cm54kgなのでそれほど心配することはないのだが、増え気味だという傾向だけはチェックしておかないと！私自身の体重もそうだが神経質にならない程度に頭の片隅に置いておかないとズルズルいきそうで怖いのです・・・

2012年12月14日 今直接活動と一緒にしていない方が、帰宅中の次男を駅で見かけ、ICカードを入れているパスケースのチェーンが短いので、タッチするのに苦労しているようだった、と私の知人に話した、と知人が教えてくれる。直接言うようなことでもないんだけど、という前置きでの話だったそうだが、ありがたく思う。次男のチェーンは早速長さを調節し、教えてくれた方に電話をすると留守電だったので、お礼を吹き込んでおく。



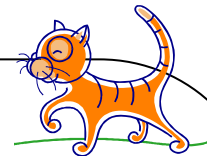
ホームページ☆
ご覧下さい！



— 自閉症者の地域生活を援助する —
社会福祉法人
横浜やまびこの里
<http://www.yamabikonosato.jp/index.php>

クリック！！

よこはま三歩



はじめまして。4月からポルト能見台で勤務している阿部未鈴と申します。どうぞよろしくお願い致します。今回、「よこはま三歩」ということで、横浜の魅力について書いていきたいのですが…実は私は秋田県出身で、さらに大学生活中は横須賀に住んでいたため、横浜に関してはまだまだビギナーです。そんな私ですが、春から上大岡に住み始め、念願の横浜市民となりました。私が18年間住んでいた秋田に比べると、人の多さ、建物の多さ、道路の広さ、ビルの高さ等、秋田とは違うことばかりで戸惑うことも多いのですが、ようやく少し外を散歩したり、駅まで買い物に行ったりという余裕が出てきました。上大岡は、とても坂の多い街で、そこで苦労すること多いのですが、家までの帰り道、坂を登りきって後ろを振り返ると、夕日がとても綺麗に見えます。また、先日散歩をしていたらおいしいカレー屋さんを見つけました。お店の名前は忘れてしまったのですが、m i o k aの裏側のところにあります。ナンがとても大きくて、カレーも辛さを調節してくれるのでおすすめです。横浜は本当に魅力的な街でもっと知りたいと思っているので、皆さんのおすすめのお店や場所も教えていただけると嬉しいです。

ポルト能見台 阿部 未鈴

△▼横浜やまびこの里後援会▼△

横浜市内で自閉症という障害を持つ人たちが地域で生活するためのサービスを、一つずつ作り出していく活動をしている『社会福祉法人横浜やまびこの里』の活動のバックアップを目的としています。

入会された方には「マンスリーやまた」「後援会報」をお届けします(郵送)

会員種別	個人会員	法人会員
会費	1口 3,000円/年	1口 10,000円/年
入会時期 (定時入会)	7月または1月	
会費納入方法	(ア)7月入会者 7月～12月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の7月に納入し、以後毎年7月となります。 (イ)1月入会者 1月～6月入会者は当該年度の会費を納入し、次回からの会費は翌年の1月に納入し、以後毎年1月となります。	
振込口座 (郵便振替)	横浜やまびこの里後援会 <口座番号> 00240-3-76163	

★後援会のお申し込み・お問い合わせ★

横浜やまびこの里 後援会事務局

TEL045(591)2728

～編集後記～

先日、所要で四国に行ってきました。せっかくの遠出なので、ついでに彼方此方と…とは思いますが、なかなか寄り道するほど時間がありません。それでも多少時間がある時には、なるべく早い乗り物は使わず、列車なら「各駅停車」で、列車でなければ「高速バス」を使って、時間を少しぜいたくに使うことにしています。車窓からいろいろな風景が確認できるところが楽しみの一つです。今回は「こいのぼり」、しかも「大漁旗」付き、5月5日はとくに過ぎたのに、大漁旗にあおられて、鯉たちも負けじと晴れた空を気持ちよさそうに泳いでいました。(小林 信篤)

表紙写真 ペンネーム：国鉄福私鉄道（こくてつふくしてつどう）

編集 社会福祉法人横浜やまびこの里（編集責任者 小林信篤）

横浜市都筑区東山田町 270 番地

TEL.045-591-2728/FAX.045-591-2768

法人ホームページ <http://www.yamabikonosato.jp/>

印刷 ワークステーション 横浜市神奈川区西神奈川 1-14-6-1F TEL.045-316-5710

購読料 1部 15円（税込み）